

図書館通信

第 3 号
R07.10.24
美和高校
図書部

文化祭での図書館展示



文化祭からもう 2 か月が過ぎようとしています。

文化祭、その後、図書館に来てくれましたか？文化祭では、3 年生図書委員による企画「ミステリー」の展示を行いました。現在も図書館内に展示しています。

文化祭では「雑誌バックナンバー譲渡会」を行いました。本校の雑誌譲渡のリユース活動は、平成 27 年から実施されている企画です。48 名の応募があり、150 冊が配布されました。特に『オレンジ・ページ』が大人気でした。

『ダ・ヴィンチ』『Newton』も人気でした。

「えっ、そんなのやったの？」というあなた、来年はぜひ応募してみてください。



今年度から美和高校で教壇に立った 3 名の先生方の『おすすめの本』の紹介ポスターが出来上がりました。

図書館前の掲示板に掲示中です。

一度見に来てください。
秋の読書の参考に！！

全国読書週間 協賛「お楽しみ抽選会」 10月27日～11月9日 開催!! 読書の秋！秋の夜長に読書してみませんか？



今年もこの期間中に図書館の図書（漫画は除く）を1冊以上借りた生徒に「抽選券」をお渡しします。今年の景品の中には、なんと高額な特別賞があります。

＊右の写真のような展示してある景品から欲しい景品を3つ（第1希望から第3希望）選んで番号を記入してください。

＊一人につき1回の抽選チャンスです。重複した応募は無効になります。

＊期間後抽選→当選した景品をプレゼントします。

＊当選しなくても必ず何かもらえます。本を借りて、抽選券をゲットしましょう。

＊厳選なる抽選の結果は当選者への景品の当選通知をもってかえさせていただきます。



読書感想文コンクール結果

今年も1・2年生の皆さんに読書感想文に取り組んでももらいました。普段、本と縁遠い人も、自分自身で一冊を手に取りページを開くという「本との出会い」の瞬間を経験できたと思います。

ステキな本と出会えましたか。

最優秀賞作品は「第70回青少年読書感想文全国コンクール」に応募しました。裏面に全文を掲載しましたので、読んでみてください。

最優秀賞		
優秀賞		



み〜くん

☆ 読書感想文最優秀作品

『1リットルの涙』を読んで

書名：木藤亜也『1リットルの涙 難病と闘い続ける少女亜也の日記』

「あなたにとっての生きがいは何ですか。」そう聞かれたら私は必ず「陸上競技をすることだ」と答えます。なぜなら、体を動かすことが好きなのはもちろんですが、特に陸上競技をしている時の私はありのままの自分でいられるからです。私は試合で負けることが大嫌いなので、勝つために努力を重ねます。このことは、私が陸上競技をする中で手に入れた強みでした。陸上競技をすることで技術面だけでなく、人としても成長することが出来る、それが陸上競技の楽しさであり、生きがいでもありました。でも、この生きがいや当たり前を病気によって奪われたのは、高校一年生の新人戦を控えた今でした。私が陸上競技をしようとする、動きたいという気持ちとは裏腹に、身体は拒否反応として倦怠感や吐き気というような症状を出しました。陸上競技が完全に出来なくなって、心を閉ざしてしまった私に、姉が今の私に読んでほしいと一冊の本を手渡してくれました。それが「1リットルの涙」でした。

読み始めた時に自分とは共通のない話だと思っていました。しかし、途中でこの本の主人公である、私と同じ十五才の少女、亜也が体調の違和感を訴えました。病院に受診したところ、脊髄小脳変性症という難病であるとわかり、亜也は絶望して「神様、病気はどうして私を選んだの。」という言葉をつぶやくのでした。

私と亜也には病気があるという共通点がありますが、唯一私と亜也には違う点がありました。それは病気になってからの行動です。亜也はまだ十五歳で人生これからだという時に自分が難病だと診断されて、病気によって青春も当たり前の生活も奪われることになりました。体の自由を奪われていくのに、頭は前と変わらずに動き続けるという絶望的な状況の中でも亜也は前向きに生き続けようと思いました。そして、自分が亡くなるまでの数年間ずっと日記を書き続け、それを生きがいとしていました。私は病気だと診断されて、私は病気だから出来ないんだと決めつけてしまうことが多く、心を閉ざしてしまっていたけれど、私と同じ十五歳の少女が前向きに病気と闘っていることを知って、私も病気としっかり向き合って前向きに病気と闘っていきたいと思います。また、亜也は私に病気になった時にどう行動するかが大切だと教えてくれました。だから、身体が動かせず陸上競技が出来なくても陸上競技が出来る身体に戻ったときのことを考えて、陸上競技や筋肉の使い方についてしっかり勉強していきたいと思います。

この本を読んで特に印象に残ったのは、亜也の病状が悪化していき、病院に訪れたときに、たまたま近くにいた親子のお母さんが亜也を指差し、自分の子供に「良い子にしないとあんな風になっちゃうよ。」と言い聞かせていたところです。私はそのシーンを読んだときに腹立たしい気持ちになりました。なぜなら、亜也ほどではないかもしれないけれど、私も病院に行った時に見ず知らずの人に「病気で可哀想」と言われたことがあるからです。私は病気になってから辛いことの方が多かったとは思いますが、闘病中でも生活の中で幸せだと思う瞬間はあったし、楽しいと思える瞬間もありました。それなのに、見かけで判断して可哀想な人と扱われたり、病気によって人生を支配されていると思われたりしたように感じ、病気の辛さとは別の涙が何度も頬を伝いました。でも私も自分が病気になる前は病気の人に対して「可哀想」という気持ちを持っていました。また、亜也は日記に「病気に対して周りの人が何でも決めつけることじゃない」と綴っていました。病気になった今の自分ならその気持ちが痛いほど分かります。亜也は確かに頑張って勉強して入った高校も病気のせいで辞めることになったり、昨日まで当たり前に出ていたことが今日は出来なくなっていたりと病気によって苦しめられて、どこか遠くに逃げ出してしまいたい気持ちもあっただろうけれど、それでも前向きに病気と闘うところを見たことがない人に好き勝手に言われるのは絶対に違くと強く感じました。

私はこの本を読んで、当たり前を当たり前だと思わずに亜也が生きられなかった分まで生きていこうと思いました。

